NEWS RELEASE

2026 年 11 月 26 日

ウェザーニューズ、2026 年 12 月～2027 年 3 月の降雪傾向を発表
全国的に暖冬で少雪傾向も、関東甲信や東北南部は大雪リスクあり
～南岸低気圧の通過頻度が平年より増加、太平洋側の雪のピークは 2 月前半～

株式会社ウェザーニューズ（本社：千葉市美浜区、代表取締役社長：石橋 知博）は、今冬（2026 年 12 月～2027 年 3 月）の「降雪傾向」を発表しました。2026 年は 11 月から北海道や東北、中部地方の山沿いで大雪となるなど早い冬の訪れとなりましたが、この先は寒気の南下は長続きせず平年より気温の高い日が多くなりそうです。シーズンを通してみるとスーパーエルニーニョ現象やインド洋の海面水温などの影響で暖気が入りやすく、東北から山陰の日本海側の降雪量は「平年より少ない」、太平洋側でも「平年並か少ない」見通しです。一方で、南岸低気圧の通過頻度が増加するため、2 月前半のピーク期を中心に太平洋側での大雪には警戒が欠かせません。社会生活に影響を及ぼす大雪となるリスクもあるので、最新の気象情報を確認し事前の備えをお願いします。最新の見解はお天気アプリ「ウェザーニュース」またはウェザーニュースウェブサイト「長期予報」からご確認いただけます。

※平年：気温や降雪量の平年は 1991～2020 年の過去 30 年間の平均

＜ポイント＞
降雪量：東北から山陰の日本海側で「平年より少ない」、九州北部は「平年並」、北海道は日本海側で「平年並」、太平洋側とオホーツク海側で「平年並か多い」、東北から西日本の太平洋側で「平年並か少ない」予想。
ピーク：北日本日本海側は 1 月後半～2 月上旬、北日本太平洋側、東日本、西日本は 2 月前半の予想。
降雪量を左右する要因：過去最大級のエルニーニョ現象とインド洋の海面水温の影響で、日本付近で偏西風が北に蛇行。このため南から暖気が入りやすく寒気の南下が弱まり、冬型の気圧配置が長続きしないため、本州の日本海側の地域を中心に降雪量は少なくなる見込み。

◆今冬（12～3 月）の降雪傾向

＜降雪量とその要因について＞

今冬の降雪量は、東北から山陰の日本海側で「平年より少ない」、九州北部は「平年並」、北海道は日本海側で「平年並」、太平洋側とオホーツク海側で「平年並か多い」、東北から西日本の太平洋側で”平年並か少ない”予想です。予想のポイントとなるのは、過去最大級の強い（スーパー）エルニーニョ現象とインド洋の熱帯域の海面水温分布と大気循環、それに伴う偏西風の蛇行です。



予想降雪量マップ 2026-2027（平年比）

現在、太平洋熱帯域では過去最大級に強いエルニーニョ現象が発生しており、エルニーニョ現象は少なくとも来年（2027 年）の春まで続く予想です。また、インド洋熱帯域の海面水温は、全体的に平年より高い状態が少なくとも来年の春まで続く予想です。

このため、今冬はフィリピンの東から海洋大陸（東南アジアの島、半島、浅い海からなる地域）付近で対流活動が平年より不活発になり(①)、中国南部の偏西風が平年よりも南を通りやすくなります(②)。この下流にあたる日本付近から日本の東では、偏西風が北に蛇行しやすくなるため、南からの暖気が入りやすく(③)、寒気の南下が弱くなります(④)。日本付近の冬型の気圧配置は平年より長続きしない傾向です。このため、今冬の降雪量は、東北から山陰にかけての日本海側で“平年より少ない”、北海道日本海側と九州北部は“平年並”、東北～西日本太平洋側は“平年並か少ない”となる見込みです。日本付近に暖気が入りやすくなる影響で低気圧が通過する頻度は平年より多くなります(③)。このため、東日本や西日本の太平洋側を中心に降水量は平年より多くなる予想です。ただ気温が高いため、降雪量としては東海から西日本太平洋側で平年並か少なくなります。東北南部太平洋側と関東甲信では平年並の降雪量を見込んでいますが、これは南岸低気圧の通過時にまとまった降雪となる可能性があるためです。気温と降水量の傾向が今シーズンと類似しているのは、2023～2024 年と 2015～2016 年の冬で、気温は全国的に高く、暖冬でした。降雪量はほぼ全国的に少ない傾向でした。なお、両シーズンとも南岸低気圧の通過で関東で大雪となった日がありました。（東京の積雪：2016/1/18　6cm、2024/2/5　8cm）



熱帯太平洋の海面水温と日本付近の大気循環の様子

＜雪のピークの時期について＞

雪のピークは、北日本日本海側は 1 月後半～2 月上旬、東日本と西日本の日本海側で 2 月前半の予想です。これらの時期は冬型の気圧配置が一時的に強まって寒気が南下しやすい見込みです。また、北日本から西日本の太平洋側は 2 月前半の予想です。これらの時期は、日本海や南岸を低気圧や気圧の谷が通過する際にまとまった雪が降ったり、低気圧通過後に冬型の気圧配置が強まって日本海側から雪雲が流れ込んで雪が降りやすくなる見込みです。なお、今冬は南岸低気圧の通過頻度が平年より多くなる見込みで、寒気の入るタイミング次第では南岸低気圧の通過時に東北南部や関東甲信を中心に大雪になる可能性があるため、事前の備えが大切です。交通機関に大きな影響が出る可能性もあるため、随時最新の情報をご確認ください。

◆昨冬（12～3 月）の降雪傾向の振り返り

昨冬は 12 月と 2 月に冬型の気圧配置となりにくく、暖かい空気に覆われやすかったため、降雪量は日本海側を中心に平年より少なくなりました。一方、1 月は上旬と下旬を中心に冬型の気圧配置が強まって大雪となった所があったため、降雪量は北～東日本の日本海側を中心に平年より多くなりました。このため、昨冬全体の降雪量は、北～西日本の日本海側は平年並、北～東日本の太平洋側は平年より少なく、西日本太平洋側では平年並となりました。3 月は高気圧に覆われやすく気温も高かったため、 降雪量は全般に少なくなりました。

今冬は、昨冬と比べて日本海側を中心に降雪量が少なくなる見込みです。

◆エリアごとの降雪傾向

エリア	本格化時期	ピーク時期	降雪量	降雪傾向
北日本	12 月上旬	＜日本海側＞ 1 月後半～2 月上旬 ＜太平洋側・ オホーツク海側＞ 2 月前半	＜日本海側＞ 平年並か少ない ＜太平洋側・ オホーツク海側＞ 平年並か多い	10 月 22 日に稚内と旭川、10 月 28 日に網走・札幌・帯広・釧路・室蘭・函館・青森、11 月 7 日に盛岡、11 月 10 日に秋田・山形、11 月 20 日に仙台、11 月 22 日に福島で初雪が観測されました。稚内・旭川・仙台・福島は平年より遅かったものの、その他の地点では平年並か早くなりました。 ＜日本海側＞ 今冬の気温は平年並か高い傾向です。冬型の気圧配置は一時的に強まることはあっても長続きしない傾向で、降雪量は平年並か少ない予想です。ただ、局地的な強雪や大雪のおそれがあるため注意が必要です。3 月の気温も平年より高い予想のため、雪どけが早まる見込みです。 ＜太平洋側・オホーツク海側＞ 今冬の気温は平年並か高い傾向です。平年よりも低気圧の影響を受けやすく、2 月前半を中心に大雪の可能性があります。3 月の気温も平年より高い予想のため、雪どけが早まる見込みです。
東日本	12 月下旬	＜全域＞ 2 月前半	＜日本海側＞ 平年より少ない ＜太平洋側＞ 平年並か少ない	11 月 20 日に新潟で平年より早く、長野で平年より遅い初雪が観測されました。また、11 月 22 日に福井で、11 月 24 日に甲府で平年より早く初雪が観測されました。 ＜日本海側＞ 今冬の気温は平年より高い傾向です。冬型の気圧配置は一時的に強まることはあっても長続きしない傾向で、降雪量は平年より少ない予想です。ただ、局地的な強雪や大雪のおそれがあるため注意が必要です。3 月の気温も平年より高い予想のため、雪どけが早まる見込みです。 ＜太平洋側＞ 今冬の気温は平年より高い傾向です。平年よりも低気圧の影響を受けやすく、降水量が多くなる見込みですが、寒気が弱いため平野部では雨として降ることが多い見込みです。ただ、寒気の入るタイミング次第では南岸低気圧の通過時に雪が降ることもあるとみられ、降雪量は平年並の予想です。また、2 月前半は大雪の可能性もあるため、注意が必要です。3 月の気温も平年より高い予想のため、山間部で雪どけが早まる見込みです。

西日本	12 月下旬	＜全域＞ 2 月前半	＜日本海側＞ 平年並か少ない ＜太平洋側＞ 平年並か少ない	11 月 21 日に広島で平年よりかなり早く初雪が観測されました。 ＜日本海側＞ 今冬の気温は平年より高い傾向です。冬型の気圧配置は一時的に強まることはあっても長続きしない傾向で、降雪量は平年並か少ない予想です。ただ、局地的な強雪や大雪のおそれがあるため注意が必要です。3 月の気温も平年より高い予想のため、山間部を中心に雪どけが早まる見込みです。 ＜太平洋側＞ 今冬の気温は平年より高い傾向です。平年よりも低気圧の影響を受けやすく、降水量が多くなる見込みですが、寒気が弱いため平野部では雨として降ることが多い見込みです。ただ、低気圧通過後に一時的に寒気が南下して雪の降ることもある見込みです。降雪量は平年並か少ない予想です。3 月の気温も平年より高い予想のため、春の訪れが早まる見込みです。

◇今冬の降雪傾向について

当社では日々、長期気象予測を行っていますが、現在の気象予測の技術水準では予測精度の誤差が大きくなる場合があります。今回の降雪傾向発表にあたり、複数の気象機関や長期予報の有識者からの見通しを元に、総合的に見解を出しています。本リリースにおける情報につきましては、発表日(2026 年 11 月 26 日)における最新の見解になります。

◇(参考)気候変動が降雪量に及ぼす影響について

気候変動により、日本の降雪量は全体として減少する傾向にあります。最新の研究結果では、1962～2024 年の日本海側の観測データから、北日本の日本海側には明確な変化傾向は確認できないものの、東日本と西日本の日本海側では 1 日の降雪量が 20cm 以上となった年間日数が減少していると報告されています。また、東日本の日本海側では、1 日の降雪量が 50cm 以上となった年間日数にも減少傾向が現れています。

一方で、日本海の水温上昇によって大気中の水蒸気が増え、寒気が流れ込んだ際の大雪(ドカ雪)を強める可能性も指摘されています。温暖化が最も進んだ場合、21 世紀末には年降雪量が全国的に減る一方、北海道日本海側や東北～北陸の内陸・山沿いでは厳冬期に短時間に降る雪の量がさらに増える懸念があります。

実際に 2026 年 1 月下旬の大雪では、温暖化の影響により新潟県以北の降雪量が約 7%増え、西日本では約 7%減ったと評価されています。気温が高い西日本では、雪が雨に変わることなどによって降雪量が減少した可能性があると示唆されています。このように、寒冷な地域では雪が増え、温暖な地域では雪が雨に変わって減るという、地域差の大きい影響が見られます。

ウェザーニューズでは、気候変動や地球温暖化によって、私たちの暮らしにどのような変化があるかを分析し、防災・減災の情報発信につなげていく考えです。

※参考文献
日本の気候変動 2025:https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/ccj/index.html
気候変動監視レポート 2022:https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/monitor/2022/pdf/ccmr2022_all.pdf
地球温暖化予測情報 第 9 巻:https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/GWP/Vol9/pdf/04.pdf
令和 8 年 1 月下旬の大雪に地球温暖化が影響(文部科学省):https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/mext_01607.html